

年次報告

染織品の整理と修理

昭和五十八年四月から同年の西宝庫定例開封前、九月末までの間の染織品の整理と修理は、つぎの二種目について実施した。

- 1 南倉一九七号櫃納在品の展開整理
- 2 諸辛櫃中の小裂片の整理

以下、右の種目ごとにその概要を報告する。

1 南倉一九七号櫃納在品の展開整理

南倉所属の一九七号櫃は現在東宝庫にあり、櫃中には南倉一四五番「覆類七点」および同一四六番「幔帳襖類一五点」のそれぞれ一部が納められている。今回の展開整理は、昨年引続いて右記の納在品を対象として実施し、つぎの四点を整理した。

- (1) 夾纈縹幔残欠幔帳襖類一五点のうち一号 一点(巻末図版六)

本件は破損がひどくて、整理に先立って伸展してみると、大片二六片

と小片二百数十片とに分断していた。それから推定したものと形は、黄地紺禪文紋縹縹表・黄縹裏と、白地赤禪文紋縹縹表・赤縹裏との、二種類の袷の帯状裂(各巾二二・五種前後)を交互に横に並べて継ぎあわせ周囲に巾約二二種の錦の額縁をめぐらせていたもののようである。縁の錦は表に^(註1)№59紫地花文錦、裏に№115花唐草長斑錦と、二種類の経錦を貼りあわせ、縁の外まわり内に麻布の折紐が通されている。もとの全巾は不明だが、いま知り得る最大巾は一六七種、丈は残片中の一片に上下の錦縁をとどめているものがあって、それによると全長二〇四種である。

なお残片中には、裏面にあたる黄縹と№115の錦面に、それぞれ共裂製のベルト通し風の貫通式ポケットをとじつけているものがあり、また黄縹面に「東大寺」の墨書をもつものが二片、同じく「東寺」と記すものが一片存在する。

比較的大きい残片二六片は、それぞれ別箇に皺を伸ばし糸目を揃え、欠損部には裏から薄和紙をあてて整理した。また小片は後日帖装に整理する予定である。ちなみに本件の名称は「正倉院御物目録」のものだが、右記のとおり夾纈ではなく紋縹であり、用途もはたして幔(幕、とばり)の類)かどうか明らかではない。

ハ付V錦継分裂残片一片、黄縹残片一片

この二片は右記(1)のなかに混入していたものである。二片中の前者は№93白茶地唐草花文錦の継ぎ分けて半臂の残片と思われる。後者は現長二三・五種、巾五七種で、(1)の裏裂の黄縹とは巾の寸法があわない。ど

ちらも、いつかの時代に(1)中に混入したのであろう。

(2)白縄袷幬 同右 九号 一条

白縄の袷で、両面とも二巾を継ぎ、丈一六三釐、巾一一三・七釐の長方形としている。内部に絹綿が薄く入れてある。両面に淡く丹粉が付着しており、また片面の一隅に白色で人面が描かれている(挿図1)。両面



挿図1 白縄袷幬の人面図(原寸)

とも、ところどころに破れがあり、内側から薄和紙をあてて破損の進行をとめた。

(3)白縄幬 同右 一〇号 一条

ひとえの白縄三巾を横に並べて継ぎ合したもので、丈二九三釐、巾一六四・五釐。一端に朱方印二顆がみえる。印文は一部をとどめるのみで、かつやや不鮮明だが、讃岐国印と思われる。数箇所小破損があるが、保存状態は概して良好であった。皺を伸ばし、破損部を薄和紙で補った。

2 諸辛櫃中の小裂片の整理

冒頭記述の期間中におけるこの事業は、中倉所属の一〇三号櫃、南倉所属の一二六～一三〇、一三七号櫃(以上全て東宝庫納在)中の小裂片を、組織、染法、文様、色相、用途などから分類して、つぎのとおり帖装(帖冊貼込み)四冊に整理した。

。八〇〇号 暈網夾縷縄残片 二六〇片合貼(一二六～一三〇号櫃納物) 一冊

。八〇一号 暈網夾縷縄残片 二七九片合貼(一二六～一三〇、一三七号櫃納物) 一冊

。八〇二号 諸色縄、縮絹残片 一二四片合貼(一二六～一三〇、一三七号櫃納物) 一冊

。八〇三号 諸色綾残片 一一三片合貼(一〇三、一二六～一二八、一

三七号櫃納物) 一冊

(註1) 以下、各錦に付けるナンバーは、書陵部紀要一三号所載「正倉院の錦」の図版番号と共通である。

(註2) X線回折分析によって鉛丹(四三酸化鉛)であることが確認された。(成瀬)

(松本包夫・尾形充彦)

経巻の修理・調査

一 修理

昭和五十八年度における聖語藏経巻の修理は、前年度に引き続き、昭和五十七年秋に出蔵した乙種写経一八六号摩訶般若波羅蜜経巻三二から同一八七号大般若経巻七六までの四〇巻について実施した。いずれも卷子装である。虫損・破損の箇所を補修するとともに、標・標題・発装あるいは軸の欠失せるものは新たに補った。

二 調査

昭和五十八年度の経巻調査は前年度に引き続き、乙種写経一六七号正恭敬経から同一八二号阿毘曇毘婆沙論十一乙までの四〇巻について実施し、調査書を作成した。いずれも卷子装である。調査結果の主なものについて、以下に報告する。なお名称で特にことわらないものは『聖語藏経巻目録』により、数値は①標紙、料紙(白紙は註記せず)と紙数、全長、②完全一紙寸法、縦×横(料紙が数種に亘る場合は主なもの)、③界高×

界幅×行数(一行字数)を挙げた(単位は種)。

一六七 正恭敬経 一巻 ①褐色紙標、黄紙五紙、二六九 ②二六・五
×五五・二 ③二〇・四×一・九×28(一七前後)、各紙背に梵字墨書あり。

一六八 国王不梨先尼十夢経 一巻 ①淡褐色紙標、黄紙四紙、一九一

②二六・四×四八・六 ③二〇・一×一・九×26(二八～二二)、卷首墨書「阿弥陀佛国経」

一六九 撰大乘論积論 九巻

巻一 ①褐色紙標、一六紙、八二〇 ②二五・六×五四・五 ③一九

・九×一・七×二・〇×30(二六～二〇)、卷末墨書「交了」

巻二 ①褐色紙標、一四紙、七三〇 ②二五・六×五四・一 ③二〇

・〇×一・六×二・一×30(二六～二〇)

巻三甲 ①褐色紙標、一四紙、六八八 ②二五・七×五二・九 ③二

〇・〇×一・七×二・〇×29(二五～二〇)

巻三乙 ①褐色紙標、二四紙、一二五〇 ②二六・一×五三・九 ③

一九・八×一・四×二・四×29・30(一七前後)

巻四 ①褐色紙標、一七紙、八二六 ②二五・六×五〇・五 ③二〇

・〇×一・七×二・〇×28(二六～二〇)、卷末墨書「一交了」

巻六 ①褐色紙標、一七紙、七七九 ②二五・五×五二・六 ③二〇

・一×一・七×二・一×29(二六～二〇)、卷末墨書「一交了」

巻七 ①褐色紙標、一七紙、九〇六 ②二五・七×五四・五 ③一九

・八×一・七五×30(二七前後)、卷末墨書「一交了」

卷十 ① 褐色紙標、一九紙、九〇一 ② 二五・三×四九・五 ③ 二〇

・一×一・六×二・二×27(二五)二〇)、卷末墨書「一交了」

卷十五 ① 淡褐色紙標、黄紙二三紙、一一二二 ② 二六・二×五二・

八 ③ 一九・九×一・七×二・二×28(二七)二〇)

『目錄』は右の通り卷一・二・三甲・三乙・四・六・七・十・十五の計九卷を挙げるが、これには訂正を要する点がある。まず卷三乙と卷十五の二卷は、陳の真諦訳にかかる「撰大乘論積」(『大正新脩大藏經』で、隋の笈多等の訳した「撰大乘論積論」(同No.一五九〇はこれを除いた七卷となり、また卷六は原本により卷八と訂正されねばならない。従って「撰大乘論積論」は全十卷のうち、卷一・二・三・四・七・八・十の七卷存となる。各巻は料紙に多少の差があり、筆蹟も区々であるが、同一の筆蹟が異なる巻にみえ、各巻第一紙端裏に「古世親撰論第一」の如く、異称と巻次とを記す点も共通するので、本来一具のものであったと思われる。次に右で別本とした卷十五は、第三紙までとそれ以降で趣を異にするが、料紙・書風からみて後半は隋経の可能性がつよい(卷末図版七)。聖語藏には別に隋経七号撰大乘論卷二が存するが、これも内容は真諦訳の「撰大乘論積」であり、両者を比較すると料紙・書風ともに類似しており、両者は僚巻と思われる。卷十五前半は二筆、院政期の補写であろう。なお尾題の後には七言偈(尾欠、藤原時代写か)が書かれているので紹介しておく(『大正新脩大藏經』には見えない)。

開真諦三藏五言偈為今七言

若人能思了義論 即是智人信三宝

由是智信二根故 得入真如平等觀

故我承仏依本記 翻解如是撰大乘

一切所生諸功德

願常供養仏法僧

救拔一切衆

一七〇 唯識二十論 一卷 ① 淡褐色紙標、八紙、四三三 ② 二六・一

×五三・六 ③ 一九・七×一・八×30(二六)二〇)、卷末墨書「一交了」

一七一 頻毗婆羅王諸仏供養經 一卷 ① 褐色紙標、灰白紙五紙、二二

〇 ② 二六・〇×五一・二 ③ 二〇・〇×一・八×28(二六)二〇)、卷

首墨書「阿弥陀佛国経」。書名「諸仏」は「詣仏」の誤。

一七二 仏説不自守意経 一卷 ① 薄紅色紙標、灰白紙一紙 ② 二六・

六×四八・七 ③ 二〇・二×一・五×一・八×27(二七前後)、卷首墨書

「阿弥陀佛国経」

一七三 仏母大孔雀明王画像壇上儀軌法 一卷 ① 灰白色紙標、五紙、

二二二 ② 二五・六×五三・九 ③ 二〇・〇×一・五×二・〇×30(一

七前後) 卷末墨書「交了」。書名「壇上」は「壇場」の誤。

一七四 歴代三宝記 一卷 卷十 ① 淡褐色紙標、二二紙、九五九 ② 二

五・二×五一・七 ③ 一九・四×一・六×二・一×27(二七前後)、卷首

紙背・卷末墨書「一交了」。本巻は外題を「開皇三宝録」に作る。体裁

・筆蹟からみて、一七六号開皇三宝録の僚巻である。

一七五 隨相論中解 一卷 ①淡褐色紙標、三四紙、一七二六 ②二五・七×五一・四 ③二〇・二×一・六〇一・九×28(二七前後)、卷末墨書「一交了」

一七六 開皇三宝録 四卷

卷十一 ①淡褐色紙標、二四紙、一二五六 ②二五・二×五三・一

③一九・五×一・六〇二・二×27(二五〇一八)、卷首紙背・卷末墨書「一交了」

卷十二 ①淡褐色紙標、二四紙、一二〇〇 ②二五・二×五〇・六

③一九・四×一・六〇二・二×26(二七前後)、卷末墨書「校畢」

卷十三 ①淡褐色紙標、二八紙、一三三六 ②二五・三×五三・四

③一九・四×一・九前後×28(二七)、卷末墨書「交了」、第七〇九紙にかけて錯簡26行あり。

卷十四 ①淡褐色紙標、二二紙、一一四九 ②二五・二×五二・二

③一九・五×一・七〇二・〇×27(二七・一八)、卷末墨書「一交了」

一七七 能斷金剛般若波羅密多經 三卷

卷上 ①淡褐色紙標、一〇紙、五〇〇 ②二五・八×五三・六 ③一

九・八×一・六〇二・〇×29(二六〇二〇)卷末墨書「一交了」

卷中 ①淡褐色紙標、一〇紙、五五三 ②二五・七×五五・九 ③二

〇・〇×一・七〇二・〇×30(二六〇二〇)卷末墨書「一交了」

卷下 ①淡褐色紙標、一〇紙、五五五 ②二五・七×五六・二 ③一

九・九×一・八前後×30(二六〇二〇)、尾題の後に「略明般若末後

一頌讚述」(義淨述(No.一八一七))を書継ぐが、最後の推定七行分を欠く。卷末墨書「一交了」。なお、書名は「能斷金剛般若波羅蜜多經論釈」が正しい。

一七八 千轉陀羅尼觀世音菩薩咒經 一卷 ①褐色紙標、三紙、一四九

②二六・五×五一・二 ③二〇・一×一・七前後×29(二七前後)、卷末墨書「交了」

一七九 蓮華面經 一卷 ①淡褐色紙標、一一紙、五六三 ②二五・六

×五六・二 ③一九・九×一・七〇二・一×30(二七前後)

一八〇 寶頭盧說法經 一卷 ①淡褐色紙標、八紙、三六五 ②二五・

七×五一・八 ③二〇・〇×一・七〇二・一×27(二七前後)、紙背に梵字墨丸印あり。

一八一 阿難陀目法尼哥離陀隣尼經 一卷 ①褐色紙標、九紙、四七三

②二五・七×五三・五 ③一九・六×一・六〇二・二×29(二五〇一八)、卷首・卷末墨書「一交了」。書名は「阿難陀目住尼哥離陀隣尼經」が正しい。

しい。

一八二 阿毘曇毘婆沙論 本年度調査分は十二卷。詳細は来年度に残りの巻とともに報告する。

(杉本一樹)

古文書の調査

昭和五十八年度においては、前年度に引き続き、統修卷四十六から同卷五十まで及び統修後集卷一から同卷五までの計一〇巻について調査書を作成した。調査によって得られた知見の主なものを次に報告しておきたい。

(1) 統修卷四十六、第二紙表は天平宝字二年八月三十日「坤宮下任安宿弟見啓」(『大日本古文書』卷四ノ二九七頁、以下『古』四ノ二九七と略記)一通であるが、その裏右端には「十六端一丈五尺七寸 二貫九百五十三文」の朱筆一行がある(『古』未収、この一行以外は空白)。表の安宿弟見啓は、当時行われていた知識大般若経の料銭進納に関するもので、この写経には葛木戸主をはじめとする坤宮官官人のほか、造東大寺司もこれを「司并他司人々等大般若」(『古』十四ノ二〇一)と呼んで、一司をあげて事業に加わっていたらしい。さて、料銭の収納は安都雄足を別当とする東大寺写経所が担当していた(吉田孝「律令時代の交易」、『律令国家と古代の社会』所収)が、関係史料中にはその際のものと思われる料銭額の朱筆書入れが散見する。前掲統修後集卷四十六の朱筆を、その中の一つ、たとえば大般若経のうち十四卷の奉写を申し出た葛木戸主状(『古』十四ノ六三、統々修四十四ノ六第一紙裏)の奥に記された朱筆と比較すると、両者同筆かつ朱の色も同じであるところから、この統修卷

四十六のものも知識料物・料銭に関係するとみてよいであろう。知識大般若経に関する史料のまとまったものとしては、紙背を天平宝字六年の「造石山寺所雑物用帳」(『古』十五ノ三一四以下)として利用され、現在では統々修四十四ノ六裏となっている継文があるが、別に統々修十一ノ六には「人々大般若帳」の題籤を付し、「葛木大夫所大般若経十四卷」の書出をもつ一紙(『古』十四ノ二二四)からなる巻も存在する。彼是勘案すると、統々修四十四ノ六裏の分も紙背利用以前は「人々大般若帳」の一部をなしていた可能性があり、ここでとり上げた統修卷四十六第二紙あるいは同卷第六紙「弓削秋麿榎井祖足啓」(『古』四ノ三一五)なども、それと同類とみることができるとはなからうか。

(2) 統修後集卷一について、『正倉院古文書目録』は次の如く記している。

一 市原宮御願写経用物帳参張

一 張 紙并緒等用帳 天平十八年十二月十一日完 (『古』二ノ五五九)

一 張 布施并直料帳 十二月二十九日完 (『古』二ノ五六〇)

一 張 装演紙送進帳 十八年潤九月十六日完 (『古』二ノ五二六)

三紙は直接に貼継がれ、首尾に新補の標・軸を付し、各巻目裏には写経所案主志斐麻呂によって「志」の封が加えられている。いま原本を検すると、現状では継紙の白紙の下に隠れている第一紙右端裏および第三紙左端裏にもそれぞれ同様の裏封の左右半分が残っていることが知られ、この三通は継文の一部から抜き取られたものではないかと推定される。さて『大日本古文書』は、この三通を『大橋本』七によって収めてい

るが、実際に『大橋本』（東京大学史料編纂所架蔵『正倉院文書』、3071. 67-1）をみると、この三通の前後には他の文書が接続した状態で影写されており、これは御物整理掛による整理以前の状態を示すものと思われる（皆川完一「正倉院文書の整理とその写本」『続日本古代史論集』中、五六八頁）。その文書とは、上記三通の他に『大橋本』七から『大日本古文書』巻二に採録されている八通であり、原本は続々修十一ノ五にあたる（『古』巻九では原本によって再録）。即ち同巻は巻末に「自私所来案」という題籤を付し、合せて十一紙からなる継文（『古』九ノ一九一以下）で、現状では第四・五紙間（一九三頁と一九四頁の間）の裏封がずれて貼継がれているが、これが統修後集巻一に残る半分の双方と合致し、更に表についても追記「私」の墨書がまたがる。

従って先の接続案は確認される訳であるが、「自私所来案」全体の復原については、続々修十一ノ五末尾（第十一紙左端）の裏に「志」の封が半存するので、その後はまだ続くものがあつたと思われ、また現在の往来軸の位置は、『正倉院御物目録』^{十二}未修古文書（皆川前掲論文、五三八頁参照）に

全 自私所来案 応奉写法花経一部云々
但修成袖(註)付 同十枚 (杉本)
(第卅六号ノ七)

(註) 傍書によって軸と訂正されている

とみえることから、続々修成巻時にかく定まった可能性もあり、なお検討すべき問題が残されているといえよう。

(3) 統修後集巻三には、現在弘長元年九月五日の「開眼筆墨等勘注」

（『古』二十五ノ付一三七頁、「雑財物注文」一通（一紙）が収められているが、標紙と本紙との間に挿入された継紙には次の識語があり、成巻当初はこの前にもう一紙存在したことが知られる。

第三横納物勘註一通紙一張五行

鏡四面弘仁二年九月廿四日齊衡三年六月廿四日勘記

右舊収在此明治廿七年御物整理移收御物納目散帳

この「第三櫃：」は『古』二十五ノ付八九に収めるものである。北倉一七三御物納目散帳は明治二十七年に御物整理掛によって編輯されたものであるが、右の一通を含め、「第一櫃納：」という形式の文言を含むものが十数通収められており、これらは内容明細及び勘検記録を記した付札として、本来唐櫃とともに伝世したものと思われる。なお、現在統修後集巻三に残る一通は、後嵯峨上皇が東大寺三倉の宝物を御覧になった折の目録と思われ（『東大寺統要録』、本巻外題は「器物目録」となっている。

（杉本一樹）

植物材質調査

昨年度に引き続き、木材、竹材以外の植物が使用されている宝物を対象とした。二箇年計画の二年度に当り、昭和五十八年十月二十四日から二十八日までの五日間にわたって実施した。

調査員は、昨年と同じ元奈良教育大学教授 嶋倉巳三郎、京都大学講師 村田源、重要無形文化財保持者 竹芸家 飯塚小玗斎の三氏であった。

調査対象品目とその種名の概要は別表のとおりである。

なお今回は、花氈、色氈の製作時にくみ込まれた植物片なども調査したが、それらは主に村田調査員の見解であるが、別表の次にまとめて記述した。

これらの結果は前年度の結果とあわせていづれ調査員がとりまとめた本誌上に見解を報告の予定である。

所属	宝 物 名	調査部分	植 物 名
北22	樺纏尺八	本体に巻く樺纏	不明(靱皮部)
北150 北151	花氈第二一号 色氈第十二号	混入植物 混入植物	オナモミ(種子) フウロソウ属の一種(種子) ウマゴヤシ属の一種(果実)
北157	礼服御冠残欠	垂飾残欠中	チヨウジ(蕾)・不明(種子)
中2	楯弓第十二号	樺纏	サクラ類(靱皮部) イネ(藁)
中8	黒作大刀第十五号	紐帯	アサ類(繊維) イネ(藁)
中8	黒作大刀第二五号	紐帯	アサ類(繊維) イネ(藁)
			把の樺桜はサクラ類の靱皮か

中12	馬鞍十具の内六号	鞆・尻背中の櫛葉	カシワ(葉)
中33	沈香末塗経筒	表面装飾	チヨウジ(蕾) 不明(種子)
中131	樺纏把鞘白銀玉虫 荘刀子一双第四号	樺纏	不明広葉樹の靱皮部 淡褐色部は針葉樹材か、玉虫近くのバンドはヤナギ
中131	烏犀把漆鞘樺纏黄 金荘刀子第十一号	樺纏	不明(靱皮部)
中202	縄断片一括		一、二号イネ(藁) 三号、カヤツリグサ科の一種?(茎) 四号アサ(繊維) 五号アサ(繊維)、ミツマタ またはチンチヨウゲ(靱皮部) 六号アサ(繊維) 七号イネ(藁) 八号イネ?(茎) 九号不明
南1	伎楽面第二七号	眉、口髭など	不明(獣毛)
"	伎楽面第四六号	頭の茶毛	不明(獣毛)
"	獅子面第一二七号	褐色の毛	不明
南74	ヒゲ数種	白、藍、黄、赤、茶	不明(獣毛) 不明(植物組織)
南42	花籠第一号	材 周縁端の止め	アケビ属(蔓茎)

南141	南140	南100	南75	南70	南65	南59	南59	南59	南59	南58	南50	南45
革帯残欠第十九号 第二十六号	帯残欠の内白絶帯 第十六号	新羅琴	子日目利帯 甲	円鏡 第十一号 円鏡 第二三号	瓊瑤丁字形八角杖 仮斑竹杖	誦数残欠第二五号 蓮実	" 第二三号	" 第二二号	" 第二一号	菩提子誦数 第二〇号	柿柄塵尾	佐波理匙
上下緑の内部 麻緒	内部の蘭	麻縄残弦		鈕につく木綿 (明治新補) 鈕につく木綿	籐、樺	蓮実	木実	木実	木実	木実	毫毛	麻縄
アサ類(繊維)	イ(茎)	アサ類(繊維)	コイヤボーキ(茎、枝)	カジノキ(コウゾ、 カラムシ)等の鞣皮繊維 右と同質	トウ(茎、不明(鞣皮部))	ハス(種子)	不明	シナノキ属(果実)	不明	シナノキ属(果実)	不明(動物組織)	アサ類(繊維)

中171	南67	"	南3	中6	中132	中23	南185	南174-24	南174-18	南148-71	南143
投壺矢	胡床	" 其三	鳥兜残欠其一緋絶	矢 第六五号	白葛箱 乙	曲物 七〇号櫃の内	華鬘 仮二八〇	椰子実	樹皮縄三本	木綿一束	履三両十八隻の内
樺纏	座の編み	芯材	芯材	樺纏	芯と巻材 縁材	止め材	芯材		麻縄、藁縄		内敷の心の蘭
不明(鞣皮部)	トウ(茎)	トウ(茎)	ヒノキ(材)	サクラ類?(鞣皮部)	アケビ属(蔓茎) エゴノキ(材)	サクラ類(鞣皮部)	アケビ属(蔓茎)	ココヤシ	一、二号はアサ類(繊維) 三号イネ(藁)	カジノキ(コウゾ、 カラムシ)等の鞣皮繊維	イ(茎)

北倉一五〇花氈には、その製作時に毛にからまって、くみ込まれた植物の果実、枝葉があり、その植物の種名を知る事もさることながら、そ

の植物種の分布地域と花莖の産地とが関連づけられるかどうかの一つの関心事であったが、結局、限定はむづかしいようである。

発見された植物名は、セリ科の果実が最も多いが、属及び種名の決定は不能であった。またオナモミの果実があったが、これはユーラシア、北アフリカに分布する。そのほかスズメノセリ属の種子、フウロソウ属の種子、カヤツリグサ科の果実、同茎葉の小片、イネ科、单子葉、双子葉植物の小片などが混入するのがあったが、いずれも属や種名等の決定はできなかった。なお色莖の一つにウマゴヤシ属の果実のあったことも申添えておく。

(関根真隆)

宝物の模造

昭和五十八年度は、北倉納物「紅牙撥鍍撥」(北倉一八)の模造を行った(巻末図版八)。模造は奈良在住の吉田文之氏(日本工芸会々員)に依頼した。

この宝物は、『天平勝宝八歳六月廿一日献物帳』(国家珍宝帳)の螺鈿紫檀琵琶の上方にある附箋に「紅牙撥鍍撥」と記したものに当り、その後『雙倉北雜物出用帳』(出入帳)の宝亀九年五月十八日の条に「螺鈿紫檀琵琶一面 緑地書押撥 納紫檀袋浅緑藤」、更に弘仁二年九月廿五日の『東細檀裏 紅牙撥鍍撥」。

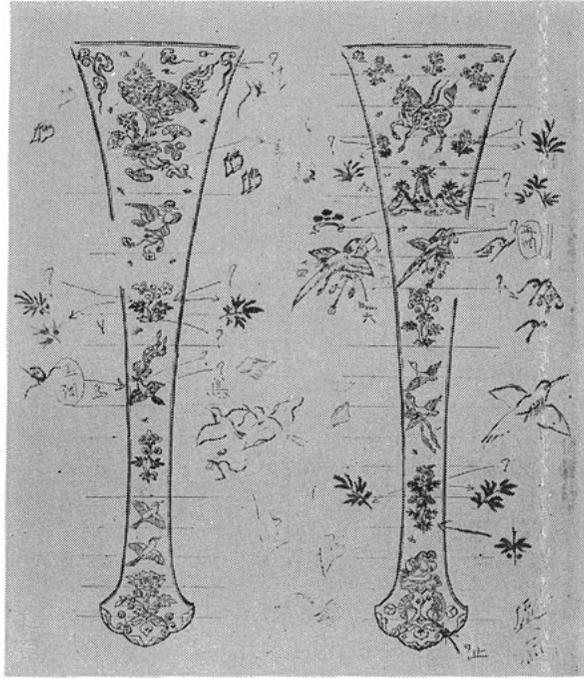
大寺使解』(勅物使解)に「螺鈿紫檀琵琶一面 加牙撥 納赤」(共に傍点筆)

者)とあることからこの撥は当初より螺鈿紫檀琵琶所屬のものとして伝えられたことがわかる。

その形状は西域・中国の古画像に現われるもの、また今日用いる雅楽のそれとも相似た、いわゆる撥形をしており、その形式は古代において既に確立され堅く伝統を守り伝えるものの一つといえよう。さて、この撥は象牙で作られており、その装飾は象牙を染めて文様を彫り出す撥鍍の技法がとられている。撥鍍の作品或はその技法は奈良時代にわが国に伝えられるが、その後千年余りの間全く途絶えており、近年ようやく再現され甦った古代技術の一つである。その文様表現が細密・繊細であることにおいては他の工芸分野の追随を許さず、それはまた撥鍍のもついの中にもある。

そこで今回模造対象となった撥に刻まれた文様をみると(挿図1参照)、全面を真赤に染めこれを地色とし一面の最上部(末方)に蓮華唐草に乗る馬頭怪鳥、その下に鴛鴦、以下花卉・含綬鳥・花卉・双鳥(雀)・蓮華文を配している。上端には花雲と靈芝雲を、また全体の空隙には胡蝶を彫りあらわしている。他面は上部より麒麟・山岳・含綬鳥・花卉・飛鳥・含綬鳥・花卉・蓮華唐草に乗る二羽の鴛鴦、上方の麒麟のまわりには花雲・草花を、全体の空隙には胡蝶を散らしている。撥の下部(本方)稜形にそって宝相華文、他の三辺外周は細線を刻み文様を括っている。文様の所々に緑青を填め彩を添えている。

この撥は両面とも絁に触れるあたりにかなりの糸ずれの跡があり、素



挿図1 紅牙撥鍍撥 下絵

地の白色があらわとなっており、また一側には鼠歯痕様の欠損がある。模造に当っては、これら細密な文様の再現と欠損部を復原することを大きな目的とした。全長二〇糎、上端(末)巾五・九糎、下端(本)巾三・一糎、上端(末)厚〇・一三糎から下端(本)厚〇・四糎である。

なお模造の仕様については、去る昭和五十四年度作成の「紅牙撥鍍尺」と殆んど変るものではないが、ここにその概要を抄録しておく。まず生地とする牙はインド産の硬質象牙を用いた。表面を染め付ける染料には綿藤脂と蘇芳汁を用い、煮染によるものとし、文様の所々に填める顔料

には宝物に似合いの粒子を持つ緑青を用いた。

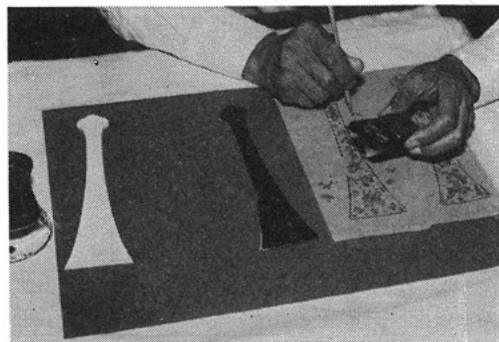
製作工程についてはまず原寸写真や拡大写真を参考に下絵の作成を行う(挿図2)。これと並行して象牙の截断、荒取り乾燥を施し、生地の安定をはかりながら鍍・砥石で徐々に宝物復原寸法に近づけ、胴擦りを施し表面仕上げを行う。

これを先に記した染料に浸して四乃至五時間の煮染を行うが、その中間時に媒染剤を加え、発色と色素の定着をはかる。染め上った生地面に昇引・文様を彫りつける。この撥彫りの工程が本宝物模造作成上最も技術を要する中心的作業である。最後に所定の文様部分に緑青の填彩を施す。

おわりに製作に直接当って頂いた吉田文之氏より貴重な感想文が寄せられているのでここに紹介しておこう。

紅牙撥鍍複製に方って

一、複製に方り宝物を綿密に観察した処、その撥鍍技術の素晴らしさに感服した。特に天馬、咋鳥の肢体の描写、唐草文の線の優美な流



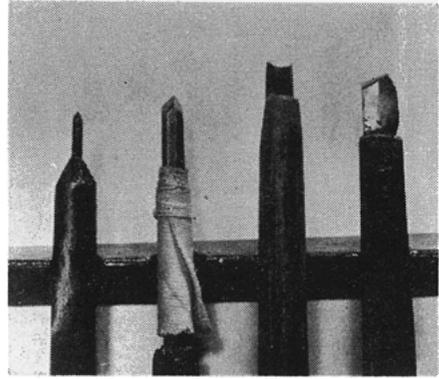
挿図2 下絵作成風景

れには見れば見る程心憎い
までの感がした。

一、如何にしても宝物の優
れた技術を再現したき事と
その威庄に屈する事なきや
うとフアイトを燃し製作に
立向った。

一、刀はこれまでの研究に
より、現使用のもの（挿図
3）と当時のものとは大い

なる変りなきものと信じ居り、刀先の作り方及其その操作が肝要と全力
を注ぎ製作に当った。



挿図3 撥彫りに使用の刀

（木村法光）

正倉院展講座

奈良国立博物館における正倉院展に際しての公開講座には、十月二十
九日に武部敏夫が出講、同講堂において、「正倉院宝物の整理事業」と
題して、御物整理掛（明治二十五年八月宮内省に設置、正倉院宝物の整
理に従事した）について紹介したが、その要旨は下記の通りである。

この事業を建議した宮内省内事課長股野琢の上申によると、宝物の整

理方針として提示されたのは、およそ次の三項であった。その一は「塵
埃」と称した古裂その他の残欠や古文書類の整理保存であって、これら
は寸絹尺紙と雖も皆千有余年の遺物であり、「精査細索、潢装補修」し
て保存につとむべきであるとしている。その二は宝物の復元修理である。
すなわち大破分散した器物の残材、剝落混淆した螺鈿・金具等は「彼此
相考覈」して復元修理を行い、破損宝物の完補をはかるべきであるとい
うものである。その三は宝物名の改訂であって、従来使用の名称は献物
帳以下の文書に就いて比較検討し、考証を付して訂正することを要する
としている。当時にあつては、たとえば献物帳記載の鳥毛立女屏風は松
下美人御屏風、漆胡瓶は黒漆銀平脱文水瓶、銀薰炉は銀鞆形釣香炉と呼
ばれていたように、いまだ名称と宝物の比定、考証が行届かず、さらに
調査を進めて名称を考定することが必要とされたのである。なお名称の
改訂に次いで宝物目録を出版し、さらに解題、図録の完成を期すべしと
論じている。

この事業は明治三十七年日露戦役の起るに及んで中止された。そのた
め古裂の整理は準備段階に止まらざるをえなかったが、古文書にあつて
は統修後集以下三種を整理して、正倉院古文書の整理を完結した。次に
宝物の修理については画期的ともいふべき成果があげられ、多数の宝物
が精妙な技術をもって修補復元を見たほか、模造品若干も製作された。
その顕著な業績は夙に紹介されているところである。なお本年出陳の瑠
璃杯・花鳥背八角鏡は、この時の修理を経たものである。次に宝物名称

の改訂の経過は必ずしも明らかではない。然し事業中止の後四年にして成った正倉院御物目録に徴すると、献物帳記載宝物以下その名称の頗る改訂されたことが窺われるのである。その改訂は蓋し御物整理掛の改訂意見にもとづくものであろう。

(武部敏夫)

秋季定例開封

昭和五十八年度の定例開封事業は、十月七日から十一月二十五日まで、五十日間にわたって行われた。御開封に際しては、安楽定信侍従が武部敏夫正倉院事務所長の先導により庫内を巡視、宮尾盤宮内庁書陵部長がこれに従った。また筒井寛秀東大寺執事長、濱田隆奈良国立博物館長、添泉四郎皇宮警察本都京都護衛署長、西田博畝傍陵墓監区事務所長の参列を得た。

御開封に当っては卜部亮吾侍従が武部所長の先導により宝庫内を巡視し、橋本義彦書陵部編修課長がこれに従った。また鷲尾晋隆東大寺住職代理、濱田奈良国立博物館長、添泉京都護衛署長、西田畝傍陵墓監区事務所長の参列を得た。

なお聖語藏経巻を納める戸棚の開閉封は、例年どおりこれらと同日に行われた。

開封期間中の業務は宝物、経巻の点検、防虫剤入替、日本美術刀剣保

存協会理事加島進氏による刀剣手入、宝物・経巻の台帳写真撮影、空調機械、計器の点検など、例年開封時期の基本業務となるもののほか、以下に記す宝物、経巻の調査や、宝物出陳に伴う業務であった。

当事務所企画になる宝物の特別調査も開封期間中の主要なる業務の一つであるが、近年は宝物材質の鑑別を目的として行っており昨年は植物質のうち葛、籐、藺など、木材、竹材を除く種々のものを対象にとりあげた。即ち樺纏尺八以下四四点で、それらを十月二十四日から二十九日まで五日間、元奈良教育大学教授嶋倉巳三郎、重要無形文化財保持者飯塚小玕斎、京都大学理学部講師村田源の各氏に委嘱して調査した。植物関係の材質調査はこれをもって終了した。

このほか東京大学史料編纂所の出願による正倉院古文書調査が六日間、東大寺図書館の出願による聖語藏経巻調査が三日間、国立歴史民俗博物館の出願による古文書複製のための撮影が六日間行われた。

宝物出陳は二度にわたった。一は奈良国立博物館における正倉院展で、別表一の通り七条褐色紬袷以下八〇点を出陳、十月二十三日から十一月六日まで一五日間にわたって一般公開した。一五五、九九三名の観覧者があった。

その二は東京国立博物館の要請による同館の特別展「日本の金工」への出陳で、その会期中十月二十二日から十一月六日までの間、別表二の宝物御冠残欠以下七点を出陳した。

(阿部 弘)

46	44	38	29	27	20	9	8	2	2	1	202	165	161	154	131	127	111 112				
佐波理皿 第一七号	佐波理匙	朴木粉絵高杯	赤銅合子	金銅大合子	金銅八曲長杯	磁鉢	磁皿	同 第三号	布作面 第二号	同 第五〇号	同 第八号	同 第七号	伎楽面 第七号	檜彩絵長方几 第一号	火舎	漆箱	黄楊木金銀絵箱	斑犀把水角鞘金銅荘刀子	同	水精玉	瑠璃小尺
一口	一枚	一口	一合	一合	一口	一口	一口	一枚	一枚	一口	一口	一枚	一口	一合	一合	一口	八枚	五枚	二枚	碧、黄	
その四			丙	甲	第三号	甲第一号	丙第一号			力士	吳公	醉胡從		甲、白石	第三九号	第三〇号	第三二号	第二号	第一号		

4-115	2-10	1-7	177	174-11	150	148	139-6	139-1	130	119	114	73	70	52	51	36	32				
根本説一切有部毘奈耶雜事卷二六	摩訶般若波羅密經 卷一	聖語藏 撰大乘論積論	箏残欠 第三、四号	蓮花残欠	白綾几褥	白椽綾几褥	緑繩緒付縹地錦縷繩合縫残片	赤絶裏広袖残片	夾縷繩衣服残欠	袍袖	唐古楽安君子半臂残欠	磁鼓	篋	銀平脱箱	円鏡 第五号	赤銅柄香炉	瑠璃如意	同 第三六号	同 第三二号		
一卷	一卷	一卷	二片	一張	一座	一張	一張	一片	一片	一領	一隻	一領	一領	一口	一張	一合	一面	一口	一枚	一口	一口
					第七号	第五号	函装古裂			第九号		漆槽					甲、鵲尾形	第一号、付題	その一	その三	

区分	番号	品目	数量	備考
北倉	157	御冠残欠	一五片	
南倉	33	金銅剪子	一枚	
"	47	佐波理加盤 第七号	九口	
"	70	鳥獸花背円鏡 第九号	一面	
"	153	仏像型 第三号	一枚	
"	156	金銅幡 第三号	一条	
"	164	金銅鎮鐸 第八号	一口	

保存環境の調査

(一) 金属表面試料腐食の調査

本調査は正倉院東西両宝庫の空気調和の効果を監視し、万一の汚染の早期発見を期するためのものであり、例年どおり神戸大学工学部応用物理学科吉田虔太郎助教授に依頼した。

調査は昭和五十七年十一月～昭和五十八年十月の約十一ヶ月に渡るもので、所定の六箇所（銀、銅、鉄の板状試料と銀、銅の真空蒸着膜試料）を設置すると共に、本年度も東宝庫南倉一階に銅板試料を設置し、表面反射

表 昭和58年度金属板最終表面反射率比及び腐食生成物最終膜厚

配置場所	銀		銅		鉄
	反射率比(%)	膜厚(Å)	反射率比(%)	膜厚(Å)	反射率比(%)
	58年度 (57年度)	58年度 (57年度)	58年度 (57年度)	58年度 (57年度)	58年度 (57年度)
西宝庫(中倉1階)	101.1(99.1)	1(16)	97.7(98.5)	103(110)	99.8(98.6)
東宝庫(北倉2階)	98.1(96.9)	16(65)	49.3(94.1)	418(156)	99.8(98.7)
東宝庫(南倉1階)	—(—)	—(—)	55.1(93.1)	265(182)	—(—)
西宝庫前室	100.2(97.7)	3(26)	87.1(90.4)	198(256)	99.2(99.3)
東宝庫前室	95.8(96.8)	14(48)	61.7(94.7)	238(154)	99.8(98.7)
西機械室還気ダクト	97.7(94.9)	23(76)	93.9(94.3)	166(192)	98.7(98.3)
*東機械室還気ダクト	100.2(96.4)	32(101)	95.2(96.4)	162(148)	98.7(97.0)

* 東機械室還気ダクト分はダクト改善工事中デンケーター中に保存

率の測定及び腐食生成物被膜の膜厚測定(偏光解析法による)と、腐食生成物の同定(電子線回折法による)などを実施した。反射率比及び腐食生成物の膜厚は、その最終値を表示した。銀板・鉄板についてはいずれの箇所でもほぼ良好な成績を維持している。ところが銅板は西宝庫関係分がほぼ昨年度並と満足すべき成績を維

持しているのに対し、東宝庫関係は機械室還気ダクト分を除き、反射率比の低下及び膜厚の増加が著しい。さらにこの定量的結果に呼応して東宝庫北倉二階の銅蒸着膜試料からは、従来の調査では未発見の硫酸第二銅三水和物が検出された。この物質の生成には亜硫酸ガスが関与しているらしい。これらの一連の現象は調査期間中に実施された東宝庫空調用ダクト改善工事の影響の現われとも考えられる。ただし銅板の変色が目立ち、反射率比の低下が著しくなったのは温湿度の上昇が見られる夏場からのことであり、まだ考慮の余地は残されている。今後も注意深く監視に努めたい。

(二) 二酸化鉛法によるイオウ酸化物汚染度の調査

本調査の目的は宝庫内外のイオウ酸化物による汚染度を把握することにある。ここでは昭和五十八年六月～昭和五十九年五月（西宝庫中倉一階については昭和五十七年十一月～昭和五十八年十月）にかけて、院内七箇所計八試料について実施した調査の結果について要点のみを報告する。

西宝庫とも庫内については汚染は認められず、本法に見る限り優秀な保存環境を維持している。前室は西宝庫では年平均 0.0001 (mg $\text{SO}_2/\text{day}/100 \text{ cm}^2 \text{ PbO}_2$ 以下同)、東宝庫では年平均 0.0003 と軽微な汚染が検出されている。正倉院外気(校倉北倉床下)は年平均 0.0008 であった。

(成瀬正和)

蛍光X線分析装置の設置

昭和五十八年度は昨年度のX線回折装置に引き続き、X線分析装置導入計画第二年度として、蛍光X線分析装置を購入設置した。

本装置は、測定試料の含有元素の種類および量を明らかにするためのものであり、測定は試料に強力な一次X線を照射し、物質を構成する元素から発生する二次X線を分光して検出角およびそのX線強度を調べることにより行う。

装置は、理学電機工業株式会社が文化財関係諸機関の要請を受け、非破壊分析を主目的として開発した「大型・不定形試料用全自動蛍光X線分析装置(システム 3511)」である。試料室は常時は $600 \text{ mm} \times 600 \text{ mm} \times 600 \text{ mm}$ の広さを持つ遮閉された空間であるが、その天井部及び側壁部を構成する鉛製ボックス(扉付)をポータブルクレーンにて持ち上げ取りはずすことにより、いかなる大きさを持つ試料の測定にも対応できるよう配慮されている。管球には文化財の測定に適当なクロム対陰極を選んだ。分光結晶にはLiF (200) と EDDT ならびに ADP が用意されている。これによって ^{12}Mg から ^{92}U まで(大気中では ^{27}Ti から ^{92}U まで)の元素の測定が可能である。

(成瀬正和)

彙報

職員の異動

杉本一樹 昭和五十八年四月一日付、採用
山口一誠 昭和五十八年四月一日付、採用